Departure English Expression

「革命」に“Get set! Go!” *Departure* 改訂版

――５領域を学び，表現力を向上させる

吉田健三

◆高大接続改革と英語教育の「革命」

高大接続改革の一環として，英語教育に「革命」が起ころうとしています。現行高等学校学習指導要領は，４技能の総合的な育成が改善の基本方針でしたが，次期版では，小・中・高の一貫した指導を目指し，CEFR（欧州言語共通参照枠）を踏まえ，「聞く」「読む」「話す（やり取り）」「話す（発表）」「書く」の４技能５領域における指標形式の目標を定めて改訂されます。また，2020年度が初年度となる「４技能英語認定試験」の導入は，2006年度大学入試センター試験でのリスニングテスト導入以降に授業でリスニング指導が取り入れられた状況とは変化の次元が全く異なります。

本来外国語教育は４技能の育成が不可欠であり，既にその指導を実践している教員にとっては，今回の改革は「革命」などといった大仰なことでなく，ごく自然な改善でしょうが，そうでない教員にとっては革命的な変化でしょう。

では，『*Departure* 英語表現Ⅰ，Ⅱ改訂版』（以下「ＤⅠ，ＤⅡ」）の魅力と改革への「レディネス」について概観してみましょう。

◆ *Departure* 特有の大きな魅力

ＤⅠ，ＤⅡでは，５領域育成の前提として「コミュニケーションで使える文法」という発想で必須の文法項目とその意味・機能やニュアンスなど必要十分な情報を提供しています。さらに発展した内容の学習については，『ジーニアス英和辞典（第５版）』や『ジーニアス総合英語』と「コラボ」して，学習者が主体的により多くの発見ができる有機的なシステム学習が想定されています。

また，高校生の知的好奇心を刺激するテーマを設定しています。高校生にとって身近な話題，時事問題，科学技術分野，人文学分野，社会科学分野，等々幅広くテーマを選択し，単なる情報の伝達にとどまらず，問題の発見や自分の意見の発表などの productive な活動に発展させています。たとえば，「選挙権と被選挙権」（ＤⅡ９課）では，被選挙権年齢の引き下げの功罪について考えさせるタスクを設定しています。

◆５領域が学べる *Departure*

平成27年度英語力調査（文部科学省）では，CEFR のＡ２レベルに達していない日本の高校生の割合は，「読む」68％，「聞く」74％，「書く」82％，「話す」89％で，４技能の総合的な育成が求められている背景となっています。

ＤⅠ，ＤⅡは現行の学習指導要領に則した教科書ですが，新学習指導要領が目指す４技能５領域の観点を既に織り込んでいます。５領域の能力向上は言語学習において不可欠であるという考えが，編集の核となっているからです。

言語習得には適切な言語使用が必要ですが，English as a Foreign Language の環境では授業での活動が重要であることは言うまでもありません。以下，ＤⅠ，ＤⅡを活用して５領域をいかに育成するか，具体的に解析を試みましょう。

ＤⅠでは，文法事項の学習（Get Ready!! および１課から20課までの１ページ目の Expres-

sions）をベースに基礎的な英語表現能力の育成をねらいとしています。授業は Warm-up で始まります。Have a chat with your partner about ... の指示に従って，ペアで各課のテーマに関する簡単な「話す（やり取り）」活動を行い，スキーマの活性化を図ります。Expressions（各課10文）で文法事項を確認したのち，2ページ目の Get Ready to Express Yourself および Express Yourself で，その文法事項の使用場面を提供し，基礎的な production 活動を可能にしています。

3ページ目では，Get More Informed の Listen Up でテーマに関するダイアローグやモノローグを「聞く」活動に取り組みます。Teacher's Manual（以下 TM）において「聞く」から「話す（やり取り）」活動へつなげる指導案を具体的に示しています。さらに，Read Up で，「読む」から「話す（やり取り）」活動の機会が提供されています。また，4ページ目は Write on Your Own で50語〜100語程度の1パラグラフの英文を「書く」活動から Speak Up の「話す（やり取り）」活動へと有機的に展開されています。

D II の Part 1（各課2ページ），Part 2（各課4ページ）では，1ページ目の「聞く」活動である Warm Up でスキーマの活性化を行い，D I で育成された文法事項の知識を文構造や機能の切り口で再構築し（Part 1：Structures，Part 2：Functions），Ways to Express It でコミュニケーション方略のひとつである「言い換え」の訓練を行います。それらの活動を通して，「書く」「話す」活動の土台づくりを意図しています。2ページ目の Practice で，既習の文構造，機能，言い換え方略の演習を行います。Challenge で，「読む」から「話す（やり取り）」活動へと自然な言語使用を促しています。

Part 2 では，3ページ目の Listen and Think で「聞く」活動を学び，D I 同様，「聞く」から「話す（やり取り）」活動につなげる具体的な指導案を TM で示しています。Keynote Passage, Outlining，さらに4ページ目の Get Ready to Write では，「読む」活動に基づいて「書く」表現活動へ発展する手順を丁寧に示しています。

D I，D II とも，「読む」活動を通して，コミュニケーションに大切な cohesion や coherency に着目するよう工夫されており，「読む」から自分で「書く」活動である Write on Your Own へと言語使用の自然なつながりを工夫しています。Write a Paragraph（D I）や Keynote Passage（D II Part 2）に示された英文は「読む」テキストと同時に，「書く」文章のモデル文となっており，英語が苦手な学習者に対しても取り組みやすいよう十分な配慮がなされています。

基礎的な言語学習に基づいて，D II の Part 3〜5 では，さらに発展的な「話す（やり取り）（発表）」活動が指導できるように編成されています。Part 3 ではブレーンストーミングでアイデアを創出し，マッピングを行った上で，意見のアウトラインを考え，1つまたは複数のパラグラフを「書く」活動へつなげます。続く Part 4 では Part 3 で学習した長めのパラグラフ・ライティングのスキルを基に，Show & Tell，Speech，Presentation といった「話す（発表）」活動を学びます。つぎに，Part 5 で高度な「話す（やり取り）」活動である Mini-Debate in Teams of Four，Debate，Panel Discussion を実際に体験します。Part 3〜5 のいずれにおいても，「話す」活動の準備作業として示された「書く」プロセスの学習は，学習者に対する「足場かけ（scaffolding）」となっています。さらに Example や Model 文の提示は，「読む」活動であるとともに，「書く」活動に対する学習者へのヒントを提供しています。

以上のように，*Departure* は，高校生自らの発展学習を可能にし，知的好奇心を刺激し，言語習得で必要な5領域を有機的に学習できる構成で，将来の「革命」に向けて“Get set! Go!”を志す皆さんを応援する教科書です。

（よしだ　けんぞう・神戸大学特命准教授）